

私はあなたに食べられたいの。

目次

私はあなたに食べられたいの。 5

番外編 Lovers made in Paradise 221

私はあなたに食べられたいの。

1 湊百合佳の華麗なる失態

今日、私、湊百合佳は高校時代の同級生の披露宴ひろうせんに出席した。

二十七にもなればそんなイベントはざらだけど、だけど。

三次元の恋愛なんかに興味がないと思っていたあの子が。

現実の男なんて気持ち悪いと言っていた彼女が。

二次元の優男しか認めなかったんじゃないやなかった？ 月日が流れて変わっちゃった？

現実のセックスなんて気持ち悪いって言ってたよね？

それなのに、銀行員で結構な資産家の息子と結婚だと？ 小柄で、ふくよかで、頭皮が不毛の大地な男性だけど。

己の信念へし折ってまで一緒にいたい人に出会っちゃったってこと？ おめでとう！ ムカつく！

高校時代、私はギャル系グループに属していて、彼女はそれよりも下の普通グループに属していた。だけど、別のギャル系グループにからかわれ、先生に注意されながらも、四六時中漫画を描き続けていた彼女のひたむきさを、こっそり応援していた。

彼女がクラスの女子からハブられていた時、無視するという女子たちの暗黙の了解に気づかないふりをし、「えー！ 何これ超すごくない？」と彼女の作品を応援していた。するとどうだ。

彼女は、私をクラスメイトの中で一番の理解者と認識し、薄い本を貸してくれたり、私の知らないアニメの話をしたりして懐いてくれた。

そんな彼女の影響もあり、ボーイズラブという耽美と禁忌の世界への扉は容易く開かれた。

だがしかし、ぶっちゃけ言うと、カップリングも漫画の傾向も彼女とは趣味がまったく合わなかったもので、卒業後に疎遠になった。

それから女子短大に入学して、BLも漫画も封印して、自分にあつた年代のファッション雑誌を逐一チェックし、モテかわを研究した。短大卒業後は、兄のツテで、派手好きで酒豪で豪胆な女性オーナーが経営するブティック『Route』イソルデに就職し、フェミニンなスタイルに、その後、二十五歳を機に大人の女スタイルへとシフトチェンジしていった。もちろん、体形維持にも化粧研究も苦労を惜しまず、だ。

するとどうだ。二十四辺りを境に男が寄り付かなくなった。就職して初めて参加した合コンで知り合い、付き合うようになった同い年の彼氏に振られて以降、日照りっぱなしだ。

なお、その彼には「お前の服好きだっただけの浪費癖だよな。将来的にナシだわ」と言われて振られた。もちろん私は憤慨した。

いつ、私が、お前に、私が着る服を買えと言った？ 服とメイクが好きで何が悪い？

その両方は、お前と違って常にときめきと自信をくれる。

私と私の好きなものを理解してくれない恋人ならいらぬ。と強気に出ていたら、彼氏いない歴がそろそろ三年。

一人で行く飲食店（主にバー）が増え、自宅の蛍光灯交換もDVDプレイヤー接続もゴキ○リ撃退もお茶の子だ。

日常生活に男の存在なんていらぬという心境に来ている。そう、日常生活に限っては。

それよりもだ。思考を冒頭に戻す。

なんで私を結婚式に呼んだのか。そしてなんで私は来てしまったのか。

そんなのもちろん、彼女のことを少なからず旧友だと思っただけだから。

だけじゃない。ちょうど二目惚れして買ったばかりの靴とドレスがあつて、さらに、出会いが欲しくて若干男性への禁断症状が出かかっていたせいだ。

恋愛映画が楽しくない。ちよつと優しくされると好きになりそうになる。部屋でのボツチ酒で泣き上戸。寒い夜の人肌恋しさの異常感。そろそろ演歌が沁みてきそう、等々。ギブミー出会いだつたからだ。

だがしかし。

相思相愛オーラムンムンで、大豆ほどの大きさの結婚指輪にフルオーダーのウェディングドレスに、三ツ星外資系ホテルでの披露宴。

新郎側の来賓は名だたる名士揃い。羨ましさと妬ましさと心細さと。私は完膚なきまでに打ちの

めされた。

来るんじやなかった。

新婦側の友人席で、ワインレッドのフィッシュテールドレスを着た私の姿は、新婦より目立っていて、勘違い馬鹿丸出しの道化者。

知り合ひなんか新婦のみで浮きまわっていたことこの上ない。その結果、惨敗を喫して一人、夜の街へ繰り出した。

二次会？ そんなもん行くわけがない。

おこぼれなんていらぬわ。ホステス代わりにされてたまるかと、ドレス姿のままお気に入りのバーに直行した。

「おー。百合佳ちゃんどうしたの？ 今日、更に綺麗じゃん」

ドアを開くなりマスターの褒め殺しにあった。

はいはい営業トーク、営業トーク。そういうところ好感度高いのよ。また来るからね！ 来たばかりでまだ帰らないけど。

まんざらでもない中、平静を装い、まっすぐカウンターに向かう。

「あれ？ ご機嫌ナナメ？」

「マティーニ！」

「しよっぱなから飛ばすねえ。あれ？ ちよつと飲んでる？」

「同級生の結婚式だったの」

ジャケットを脱いで膝上にかけて、黒い大きなリボンがついたモノトーンの小さなバッグをその上に置いた。

「なに昔の男？」

差し出された熱いおしぼりで顔を拭いてみたい。でも、化粧をしているから実行したことはない。なんたって今夜のメイクはいつも以上に完璧だ。

「はずれ。普通に高校の時の同級生。女子校だったの、私」

おしぼりで手を拭き、脇に置いて答える。マスターはカラカラ笑ってカクテルを作り始めた。カウンターに六席、四人掛けのテーブル席が二つほどのそうたいして広くないこの店は、元バンドマンだったというマスターの意向か、いつもいろんな音楽がかかっている。

今かかっているのは荒んだ心模様のように激しく骨太なロック。音楽好きな兄のおかげで、私は聞く耳を持っている。周りの女の子より少しだけ男っぽい音楽が好きなのは、元バンドマンの兄のせいかもしれない。

シャウトがかっこいいボーカルなんて、十代の頃好きだった四人組のバンド以来、初めてかもしれない。ベースもなかなかゴリゴリな音でお腹に来る。久しぶりにこういうのもいいかも。そんなことを考えていると、カクテルが目の前に置かれた。

「今夜は今のところ私の貸し切りだね」

私が言うのとマスターは困ったような笑みを浮かべ、肩をすくめた。

「どこもこんな感じで、大変みたいよ。まあ、仕方ないけどね」

最近ちよつと太り始めた彼は、一年前に十年近く付き合っていた彼女と結婚したらしい。奥さんは妊娠中。お店はそこまで繁盛しているわけではないけれど、彼は独自の幸せを順調に育んでいる、とのことだった。

それに引き換え私ときたら。思わず溜息が出る。

「元氣ないねえ。大丈夫？」

「うん。大丈夫。ね、今かかっている音楽、誰？」

何気なく聞いたつもりが、マスターの目が輝く。

「これね、クラックスパナビレッジっていう地元先輩のバンドで、当時めっちゃめちゃ人気があつたんだよ」

「そうなんだ。かっこいいね」

とカクテルグラスの中身を一気に呷る。やばい。なんだか意味もなく戦ってやるって気になってきた。

「ちよ、百合佳ちゃん。どうしたの。荒れてない？」

「喉、渴いてるの。マスターおかわり」

「ほどほどにね」

「うん。でもこのカクテル美味しいよ」

本当のことを言ったつもりだったが、彼は照れて謙遜した。ちよつと可愛い系の目鼻立ちぱつちりの顔は好みとは違うけれど、好感が持てる。

少量の内容物しか入っていない胃の辺りがアルコールでじわりと温かくなる。悶々としていたせいか、急激に思考能力が弛緩した。

ああ、もう。なんか、全部どうでもいいから、男と寝たい。

ここ数年人肌と無縁だ。数ヶ月じゃない。数年。

股の緩い女なんて惨めだとか、そんな常識どうでもいいから、男が欲しい。

サラリーマンとか公務員とか弁護士とか、そんな肩書きいいから、遅い男の腕に押し込められたい。

胸板で圧迫されたい。

結婚とかどうでもいいから。とりあえず人肌。

草食とか堅実とか華奢とか中性的な綺麗な顔とかじゃなくて、遅く骨太で肉食な獣に喉笛喰い千切られるようなセックスがしたい。

理由とか持続性とかましてや将来性とか求めないから、神様。お願い。

今すぐ荒々しくて卑猥な獣を私にちょうだい。

「おまたせー」

マスターの朗らかな声で、むちゃくちゃな思考が中断された。

「あ。ありがとう」

「大丈夫？」

マスターが心配そうにこちらを窺っている。

「あ。うん。大丈夫。慣れない格好で疲れちゃったかも」

苦しい言い訳をして、作りたてのマティーニを啜る。

「気をつけなよ？ ちょっとごめん」

マスターは苦笑してカウンターの奥へ消えてしまった。

何に気をつければいいのかしら。清らかな娘さんでもあるまいし。欲求不満で即物的なこの思考を改める気なんてさらさらない。なんて息巻いていても一人ぼっちだ。

その時だった。

ドアベルが鳴り、「あれ？」とこちらの肌を粟立たせるような色つばい低音が聞こえた。

板張りの床にゴツ、ゴツ、と硬質な足音が立つ。

「隆夫、いる？」

戸惑いがちな声に振り向くと、少し長めの黒いパーマヘアに、デザインングされた鬚をたくわえた、端正な顔立ちの男が立っていた。

骨太で筋肉質な長身。シアリングカラーのレザージャケット。渋い色味のデニムパンツに、いい具合に艶消しされたキャメルのエンジニアブーツ。

腕や指にはハードなシルバークセサリーが一つずつ。びっくりするくらい私の理想のワイルドな風貌。視界に入った瞬間、心臓が撃ち抜かれて呼吸が一秒止まった。

声が出ない。目と目が合って離せない。私は鋭さも兼ね備えつつ、色気駄々漏れの垂れ目に弱い。都合よく現れたワイルドな男前にうっかり見惚れていると、マスターが戻ってきた。

「うおおお！ 一ノ瀬さん!! お久しぶりです！」

「おう。久しぶりー。でも今回三ヶ月ぶりくらいか？」

あつぶな！ 鼻血出てもおかしくない。形のいい薄めの上唇に、ぼつてり厚い下唇とかエロイんですけど。

そのうえ色っぽい重低音。エロ、色気、エロ、色気、そしてアクセントはセクシーフェロモン。エロのミルフィーユ？ ごちそうさまです。ああ！ さらに酔っぱらってきた。

関心ありませんよ、の体で男前に背を向けた。けれど行動とは裏腹に、脳内は完全に盛り上がっている。

どうやら二人は旧知の仲らしく、マスターはカウンターから出てきて、ワイルドと握手した。

共通の知り合いの消息を確かめ合ったり、互いの近況報告をし合ったり。

マスターは彼におしぼりを渡して、彼はラムロックスを注文した。

この店に通い始めて一年になるが、こんな男前見たことがない。マスターは彼を前に、少年のようにキラキラした眼差しをしている。

マスターを持っていかれて一気に手持ち無沙汰になってしまい、マティーニをちびちび飲んだ。さっきの独りよがりな欲情は霧散して、ただただ体がまどろっこしい浮遊感に侵された。

左肩の辺りに意識が集中し、男の気配を敏感に感じ取っている。

ただ、欲求はあっても実行の仕方がわからない。相手にだつて選ぶ権利があるし、自分が彼の眼鏡に適う確証はない。

酔った勢いでうっかりそんな流れになるには、相手にやる気を起こさせなければならないし、そうさせるだけの魅力が自分にあるかは疑わしい。

これだけ男前なら、自分レベルの女なんて周りにゴロゴロ転がっているだろうし。ああ。馬鹿みたい。

今日はもう帰ろう。

ジャケットとバッグを持ってストूलから降りて右足を床につけようとしたら、浮遊感から膝の力が抜けた。

がくりとよろけて転びそうになった瞬間、むき出しの二の腕を、力強い掌が鷲掴みした。

「つぶねえ。大丈夫？」

振り向くと端正な真顔が視界いっぱいに映る。その凛々しさに改めて衝撃を覚えた。

夜の歓楽街で持続性ボーイミーツガールなんてあるはずもない。突発性ラブアフェアで、よくてホッカイロ並みの相互関係が関の山。でも、それでもいい。

一度つきりで構わない。そう思えるくらい、彼の姿形はこの上なく好みだった。

「大丈夫？ 百合佳ちゃん」

マスターが瞠目している。

「大丈夫。す、すみません。ちょっと酔いが回ってしまったみたいで」

恥ずかしい。恥ずかしすぎる。体勢を取り直し、マスターと彼に愛想笑いを浮かべる。掴まれた部位が鬱血してうつすら赤くなっていた。

「マスター、今日はもう帰るね」

「そうしたほうがいいかもね。タクシー呼ぼうか？」

「ううん。ちよつと酔い覚まして帰る。まだ時間早いし、表通りで拾う。いくら？」

マスターの気遣いを断って財布を取り出す。会計を済ませ、一歩踏み出すと。

「ちよつと待つて。そんなヒールの高い靴履いてふらついていたら、危ないよ？ おれが表通りまで送ろうか」

思考回路に落雷。信じられないような男前の申し出に、体能力がフリーズする。そして一番に暴れだしたのは心臓だった。

「そうしてもらえると助かります」

人のいいマスターはホツとしたように同意した。

ちよ、ちよちよちよ、ちよつと待つて！ えええ、と声が出せないで脳内で喚びた。

「い、いえ。お気になさらずに。せっかくの時間をお邪魔するわけにはいかないので」

その優しさに下心があるなら、受けて立つけれど。あ、やっぱ嘘。やっぱ無理です。男前すぎて怖い。心臓が破れそう。頭が混乱してきた。私は、本番には一度怯むタイプだ。

「途中で転んだら危ないし、この辺物騒だからダメ」

ダメって、そんな。私の心臓が過労死する。助けを求めるようにマスターを見る。

「大丈夫だよ、百合佳ちゃん。気にしないで送ってもらいなよ」

マスターは私の混乱も知らずに後押しする。

「いや、だつて、マスター久しぶりの再会でしょ？」

心なしか声が上がった。

「男同士でそんなに再会に浸らなくてもいいんだつて。なあ隆夫」

「一ノ瀬さん、綺麗な女の子大好きですもんね」

「てめ、そんな言い方すんなや。誤解されるだろ」

女の子も男前大好きですけどね！ と思いつつ、自分が綺麗な女の子に組分けされる自信なんてない。

ちらりと盗み見た一ノ瀬さんは、私好みのセクシーな唇をちよつと尖らせて、恨みがましい目でマスターを睨んでいる。マスターはそんな彼を、からかいを含めながら「まあまあ」とたしなめた。「でも、やっぱり申し訳ないので結構です」

子供っぽい仕種にきゅんとして、ちよつと笑ってしまいつつ私は言う。

「ご心配おかけしてすみません。ありがとうございます」

軽く頭を下げて、ふらつかないように注意して歩きだす。

少し酔いも覚めたらしい。

男前も見られたし、それでよしとしよう。ジャケットを羽織り、軽くなった足取りでひよこひよこ歩いていたら、入り口の段差を忘れていた。

「ぎゃっ！」

「えええええ!?」

背後のドア越しから男二人の驚いた声が聞こえた。段差はそんなに高くないのに、足首をくじいて(変な方向に曲がった)そのまま横転。

さ、最悪すぎる。

これはやはり人様を馬鹿にしたり妬ねたんだりした罰だ。その証拠にお気に入りのヒールがばっきり折れている。

昭和歌謡曲の恨み節に出てきそうな敗北感丸出しの横座りのまま、がっくりと頭こぶしを垂れた。

もう、やだ。腰打って痛いし、ついた手を擦りむいている。痛い。体的にも痛いし、客観的にもイタい女。延々と脳内自虐は続く。

「ほら。人の厚意を素直に受け取らないから〜」

上から降ってきた声に顔を上げると、顎髭あごひげが似合う男前がこちらを見下ろしていた。

「隆夫、タクシー呼んで」

「もう呼びました」

「さっすが〜」

奥から返ってきた返事に頷いて男前——もとい一ノ瀬さんは少し屈むと、私の脇に肩を入れ込み、腰を抱き寄せた。

「はい、立って」

耳元に低い声。鼻孔に硬質なフレッシュ・グリーン・ノートが香る。密着しないと香らないところが好感度を爆上げする。むしろ好感度しかない。

私の思考などつゆ知らず、彼は私を立たせ、そのまま店に戻ってテーブル席に誘導した。

「あーあ。手え擦りむいてるし、ヒール折れてんじゃん」

足元に跪ひざまずくように片膝をついて呆れた口調で言った。

「絆創膏探してくるね」

マスターが一ノ瀬さんにおしぼりを渡して、バックヤードに戻った。

「せっかくのドレスと靴が台無しだね」

「すみません。結局ご迷惑おかけして」

「迷惑? いいや? 役得だな、と」

一ノ瀬さんは人の悪い笑みを唇の端っこに浮かべて、人差し指で私の脛すねをスツとなぞった。ゾクツと背筋が痺れる。

「え、あの」

「ここ、伝線してるよ」

打って変わって悪戯いたづらっぽい笑顔を見せると、一ノ瀬さんは立ち上がってカウンターに戻る。

「絆創膏あった! 百合佳ちゃんこれ使って」

「ありがとう。ごめんね、マスター」

小走りで戻ってきたマスターから絆創膏ばんそうこうを受け取り、手の付け根に貼っていると、割と早くタク

シーが到着した。

「じゃあ、隆夫。金置いていくから」

ラムを飲み干した一ノ瀬さんが硬質な足音を立てて、私の前で立ち止まった。

「じゃあ、お願いしますね」

マスターとそんなやり取りを交わして、彼は私の眼前に掌を差し出す。

「人の厚意は素直に受け取らなきゃ、また罰当たるよ？」

脅しのような含めた笑顔で促され、私はその手を取った。

「んじゃ、隆夫。お姫様もらっていくわ」

一ノ瀬さんはマスターに少年っぽい笑顔を向ける。

「なんかあつても、おれ責任取らないからね」

冗談にしては悪質すぎる送り言葉をさらつと吐いて、マスターは笑顔で手を振った。

店を出ると、一ノ瀬さんから「そういう靴にはさ、こういう杖が必要なんじゃない？」と言われた。「杖ですか？」と訊き返すと「おれみたいな」と、私の手を自分の腕に置いた。

えええ。なにになに？ 素敵だけにステッキって？ 言わないよ？ ロマンズの神様が裸足で逃げ

出すからね。と心の中で悶絶しつつ、控えめな笑顔を作る。

「嬉しい。ちょうど欲しかったのでお借りしますね」

靴の踵の折れた左足のバランスが悪く、爪先をつき、自分史上最高の男前にエスコートされながら、なんとか店を出た。

問題はこれからだ。タクシーに乗り込めば当然、行き先を尋ねられる。

「えーっ」と

このまま、家に帰るのでさよならバイバイ？ そんなあつけない。味気ない。もつたいない。

「百合佳ちゃん？」

名前を呼ばれて胸がギュツとなる。

猥雑な輝きに溢れた繁華街の一角にいる、泥酔した女と介抱する男。傍目から見ればそんなもんだらうけど、実際はそんなに酔っていない。

肩が触れ合うくらい近くにいる、理想の男。心臓がやばいくらい早鐘を打っている。

「大丈夫？」

低い声が近い。近すぎて思わず体が跳ねた。大丈夫なわけない。けれど。

「だ、大丈夫です」

一ノ瀬さんが少し背中をかがめて覗き込んできた。

「初対面でこんなこと言うのもなんだけど、嫌なことでもあった？」

心配されるような理由でへこんでいるわけじゃない。自分が見てくれだけの馬鹿女だつてことを思い知らされただけ。

ぐずぐずしていたら運転手の無言の圧力がルームミラー越しに伝わってきた。

「そう見えました？」

「うん。あと、帰りたくなさそうに見える。おれが来たせいで仕方なく帰るなら、どっかで飲みな

おす？ 付き合うよ」

願ってもないお誘いがきたああああ！ 脳内で渾身のガッツポーズを決めた。運転手にごめん、と一瞬の愛想笑いを向けて、一ノ瀬さんに向き合う。

こんなに至近距離でまっすぐ見つめられたのっていつぶりだろう。

顔に血液が集まっている。くすみ大丈夫？ っていうか、化粧直しすればよかった！ ああ、なんて詰めの甘い。こんなんだから男運に置いてけぼりされるんだ。

激しい後悔と自責も、「百合佳ちゃん？」と呼びかけられて霧散した。

わずかに見えた可能性。この人、もしかして、私、いける？ うっかり自惚れたら、欲情に火がついた。

めちゃくちゃ理想のワイルド系。ギラギラの金メッキじゃなくて燦し銀。

ヤバい。これ、もしかして、ビッグチャンス？

どうせ本命なんてなれるはずないし、いい子アピールなんか無意味だ。

男日照りで心も体もカラッカラだし、ちよつくら女性ホルモン分泌しとく？ 一期一会なら別に淑女ぶる必要はない。

どこか投げやりになりつつも欲望へとレールを切り替え、わずかに顔を寄せると唇が重なった。

「こういうの、ご迷惑でしょうか？」

「ん？ 大丈夫。さっきも言ったけど、役得だと思ってる」

一ノ瀬さんは好戦的に笑って、腰に巻き付けた腕に力を入れた。私は笑い返して彼の耳に唇を寄

せる。

「ではさっそく、どこか行きませんか？」

「それって、二人だけになれるような場所ってこと？」

私の悪巧みに、彼はあくまでさらりと返す。吐息で耳朶を撫でるような話し方。

悪いなあ、この人。悩殺がお得意なようだ、と私は思わずほくそ笑む。

「お嫌でしたら、無理強いはしませんけど？」

くすぐったくてクスクス笑っていたら、不意打ちで耳を舐められた。

声より先に首から背中にかけて電流が流れる。

「あっ」

「こういうこと、百合佳ちゃんにもっとしていい？」

「複数プレイとハードなSMとスカトロは無理ですよ？」

「おれだってヤダよ」

とんでもないことを囁き合って、互いに嘖き出して、また声を潜める。

「それ以外なら？」

と低い声で挑発されて、嬉しくなって笑みがこぼれた。

「お望みとあらば」

「望むところだよ」

二人でわざとらしいやり取りをまとめて、笑った。

一ノ瀬さんが運転手にホテルの名前を告げると、短い返事の後、車が発進した。ふと、窓の外を見やると、マスターが驚愕と好奇の入り混じった複雑な表情を浮かべて、店先に立っていた。

「マスターのこと忘れてましたけど、今の見られてましたよ」

「わかっててやったんじゃないの？」

一ノ瀬さんは小さくなつていくマスターを振り返りながら、軽く手を振る。

「まさか！」

いいのかな、こんなとんとん拍子。次からどんな顔してあの店に行こう？ 一瞬不安が過つたが、もう遅い。

初対面の男と即ホテルなんて怖くないと言えれば嘘になるけれど、もう自分から誘つたんだ、開き直ろう。ただひたすら痛いのは嫌だけど、少しくらいなら乱暴にされたつていい。

あーでも、本気の凌辱プレイは御免被りたい。不安と期待を交互に抱え、持て余した。

「やっぱり自棄？」

全然関係ないことを考えていたので咄嗟に彼の質問に答えられなかった。けれどすぐに「何も聞かないでください。頭空っぽにしたいんです」なんてかっこつけたら肩を引き寄せられ、キスを喰らった。

押し当てられた厚めの唇から舌が送り込まれ、ラムと香水の香りが流れ込んでくる。執拗なほど舌を絡ませ合い、水っぽい音を立てて唇を離れた。

「頭空っぽになった？」

一ノ瀬さんは悪戯っ子のような眼差しでこちらを覗き込む。ただ惚けて彼の瞳の黒い部分に入る。

「まだ、足りないです」

言い終わらないうちに、噛み付くようなキス。

もともと抗うつもりなど毛頭ない。彼の首に腕を巻きつけて思う存分口づけに応える。

うああ、この感触いつぶり？ マジで。潤う。下腹がぎゅゅと疼いて体から力が抜ける。キス上手い。

これは大当たり。手馴れてるなあ。遠慮なく私の背中や腰を撫で回すこの掌で、何人の女をその気にさせてきたのか。

望みどおりのちよつと強引な口づけに圧倒されつつ、離れたりくつつけたりを繰り返して適度に溺れていたら、目的地に到着した。

一ノ瀬さんが支払いを済ませてさっさとタクシーを降る。後に続いてお礼を言おうとしたら、軽いキスで遮られた。

「さて、やめとくなら今のうちだけど、どうする？」

隣を見上げると、ビーストモード一步手前の男前。からかい混じりの試すような口ぶりが、余裕っぽくてちよつとムカつく。でも、せっかく火照った体を冷ましたくない。

「選択肢なんてありました？」

「今なくなつた」

低い囁き声に全身が震える。うわあああ。耳が幸せ！と悶えていると今度は頬に軽いキスをされて、誘われるまま自動ドアの先へ連れていかれた。

絡ませるように繋いだ手を振りほどけるはずがない。後戻りする気なんて、さらさらない。

一夜限りの恋なんて初めて。でも、そんな言葉を連ねるほど嘘っぽくなる。ここまで来たらあとはままよと足を速めた。

予想外のラグジュアリーなホテルに圧倒されている私をよそに、彼はフロントと言葉を交わし、さつさとチェックインを済ました。

「宿泊でよかつた？」

一ノ瀬さんはカードキーを受け取り、繋いだ手を遊ぶように持ち上げて私の手の甲に唇をつける。

「私、明日は休みとつてるので大丈夫ですけど、一ノ瀬さんは？」

「おれ、明後日までオフ」

肩を抱かれながらエレベーターを降りて歩みを進め、部屋のドアを開けると、白と藍色を基調とした内装のリビングルームが広がっていた。真っ白なシーツにシックなブラウンのクイーンサイズベッドとソファ。大きな窓の向こうにはレインボーカラーに輝く観覧車が見える。全体的にムーディーな鉛色の照明で照らされているのがまたいい。

素敵だけどやっぱり窮屈だった靴から解放された気軽さと、予想を超えた部屋の雰囲気よさに浮かれて、あちこち見回してしまふ。

「綺麗！ 素敵！」

一ノ瀬さんが微笑む。

「お気に召したようだなにより。そう喜んでもらえると連れてきた甲斐があるよ。まあ、宿泊にしたり、時間はあるからなにか飲まない？」

「いいですね！ なんにします？ 私なんだか喉渴いたのでビールいきたいんですけど」

「ビールね。オッケー」

一ノ瀬さんは、フロントに電話してソファに腰を降ろした。

「気分が削がれたら申し訳ないんだけど」

という一ノ瀬さんの前置きに思わず喉が鳴った。まじまじと彼を見つめる。

もしかして既婚者カミングアウト？ 別に一期一会の気概だから私はいいいけど。あ、でも性病は勘弁して欲しい。いや、性病もちだったら黙ってるか。えーなにに？ と心の中で騒ぎつつ、黙って告白を待つ。

「勢いでここまで来たけど、ぶっちゃけこういうシチュエーション初めてで、実は結構緊張してんだよね」

え。嘘でしょ。そんなリップサービスいらさないよ。私だってこんなん初めてだよ。そんな駆け引きいらないよ？ どうしていいかわかんなくなるじゃない。さっきの勢いで獣エスコートしてよ。

胸の裡で悪態をつきながらも、みるみるうちに体が硬くなっていく。欲情とまったく別の緊張と、急激な羞恥心でじわじわと表皮のほうに血液が集まっていくのがわかった。

勢いが行方不明になってしまった。よろよると隣に腰を降ろして膝の上で拳を握る。

「ドン引きした？」

一ノ瀬さんが不安げに覗き込んでくる。

「そういうわけじゃないんですけど、ただ」

なにもじもじしているの私たち。恋という魔法に出会ったばかりの少女少女じゃないのよ。勘弁してよ。

いまさら照れている自分がどうしようもなく恥ずかしい。

「言わせてもらえば、私だってこういうの初めてで、あの勢いで突っ走ってもらいたかったっていうか」

「うん、ごめん。ベッド見たら実感湧いて焦った」

んなああつ！ なんだこのくすぐつたいの！ ワンナイトフィーバー中止のお知らせ？ 至近距離で照れ合う男女つてなに。これじゃ、なんだか、ただのボーイミーツガール。いや、即ホテルつて時点でそんな純情可憐なものじゃないけれど。「なーんてね、冗談。マジ照れちゃって、意外に可愛いじゃん？」とかチャライこと言つてキスしてくれる展開は、なし？

懇願を含めてチラ見すると目が合つて、彼は困ったような微笑みを浮かべた。

ダメだ。それ反則でしょ。可愛くつて好きになる。いや、なってる。いや、いやいや。どうせこの恋は一期一会。落ち着け、私。相手はスペシャルな男前よ。私みたいな雑魚はすぐ忘れられる。はあ。

ぎこちなくなつた空気の打開策を見出せず、行儀よくソファに並んでビールを待っている。

耐え切れなくなつた一ノ瀬さんがテーブルの上のリモコンをとつて大画面の薄型テレビのスイッチを入れた。有料VODだったのか、

『あああん！ イっちゃう！ イっちゃ』

たわななおっぱいを揺らして、がっつりと男性器をくわえ込んだ女の子が画面いっぱいに映つたのも束の間。ふたたびテレビは真つ黒に。

ちらりと横を窺うと、「違う。違う、そうじゃない」とがっくりとうなだれた男前。さらに事態は悪化の一途。

こんな可哀想な男前見たことないよ。痛ましい。これがちよつと理想より下段レベルだったらここまで来ないでさっさと帰っていたわけで。よし。もろいいや。どうせこの恋、今夜限り。今を楽しもう。

「あの一、一ノ瀬さん」

「え？」

「さっきのキス、すっごく気持ちよかったですよ？」

「え？ あー。てか、おれも。キスだけでもすごいよかった」

「ふふ。あんまりよかったんで、ついがつついちゃいました」

「おれも」

ちよつとだけ和やかな空気。一夜のアヴァンチュールに必要な成分とは言いがたいが、今の自分

たちには必要な気がする。

「とりあえず、湯船にお湯張っちゃってもいいですか？　せっかく宿泊なんですから満喫しましうよ！　ね？」

そう言うのと、強張った表情が少し解けて、彼はかすかな笑みを浮かべた。えー。なにこの男前、可愛い。

「風呂たまるまで少し、話そうか」

しょんぼりからちよつと立ち直った情けない男前って本当に可愛い。まだ困惑が残っている一ノ瀬さんに胸キュンしながら、はい、と頷いた。



ソファに並んで、ビールを飲んでいたらあつという間になくなり、一緒にメニューを見てワインとから揚げ&ポテトフライを追加。軽くつまみがあつたらいいよね、何食べる？　ちよつと油モノいつときますか？　いいねえ〜！　なんて、きゃっきゃわいしながらフロントに電話して待機。

「結構楽しいね」

受話器を置いて戻ってきた一ノ瀬さんが隣に腰を降ろす。心なしかまた距離が近い。意識してしまつと心臓が早鐘を打ち、大人の自負も、なけなしの余裕もうやむやになる。

「いきなり宅飲みつぽい雰囲気になっちゃいましたね」

「ね。でもその格好、なんかのパティー？　それとも結婚式？」

「披露宴帰ります。これ、綺麗な赤だから気に入って購入したんですけど、披露宴で超浮いちゃつてました。すごい恥ずかしい」

あはつと照れ笑いで誤魔化して答えると、一ノ瀬さんもあはつと笑った。

「でもいいじゃん。金魚みたい」

「金魚ですか？　え、それつてもしかして丸いってことですか？」

自虐ネタだけど、最近ちよつと肉がついてきた感は否めない。

「ひらひらして綺麗だなんて思ったんだよ。てか、もうちよつと肉つけたほうがよくない？」

「いや、ついてきたんですって。ほんと最近ヤバイんで」

どんだんエロティックモードから遠ざかっているような。ちらつとそんな危惧が頭を過る。緊張はしているが、このまま健全に終わるのは惜しい。

「そうは見えないけどなあ」

「いいえ。油断できないんです。いくらドレスが綺麗でも、着る体のラインも綺麗じゃないと、せっかくのドレスの美しいラインが台無しになるんです！」

彼は少し驚いたような顔をして、すぐに笑顔になった。

「ということは、脱いでも綺麗ってことか」

「えっ。あ、いや、あの」

「ドレス、綺麗だよ。似合ってる」

あ、そっち？ と肩透かしを食らったが、でもいいか、と気を取り直す。

「ありがとうございます」

「好きなの？ 服とか」

「好きです。服とか、コスメとか」

不意に昔の男の言葉を思い出した。ただの浪費なんて言われたくない。

「好きなものを見せびらかして歩いてるんです、私。いいでしょう？」

鼻息を荒くした私に、彼は目を丸くしつつ、フツと噴き出した。

「うん。いいね」

軽く流された。やっぱり、私、説得力になるような色気も魅力も枯れているんじゃないだろうか。

「おれも好きだよ。服とか、小物とか」

「確かに。こだわりを感じます」

「そう？ 実は今日リングとか適当につけてきたんだけど、あ。買う時はちゃんと好きで買うよ？」

ちよつと焦って訂正するところに可愛らしさを感じる。見た目ワイルドなのに、優しいというか、

人が好きそうというか。高飛車だったり、つんけんしてないところがすごくいい。

「ふふ。似合ってますよ。ごてごてしてないのに存在感があつて、すごく素敵です」

「なんか。照れるな」

はにかみながら、大きな掌で自らの頬を撫でる。ああ。あの手には撫でられない。

「私もシンプルでシックな装いをしてみたいとは思うんですけど、つい派手好きに。引き算のお洒落

落ができないんですよ」

「いいじゃん。その分食事は引き算ばかりしてるんだろ？ それに好きなものを見せびらかして

歩いてるなんて最高にかっこいいよ。少なくともおれは好きだ」

その真摯な眼差しと励ましに胸を打たれた。何ならちよつと涙が出そうだ。

「前の男に聞かせてやりたい！ こういう意見もあるんだって！」

「そんなにシヨックな披露宴だったの？」

「え？」

ぎくつと肩が強張る。心のどこかで下に見ていた同級生の幸せいっばいウェディングにやつかみまくって、自分のモチなくなつたシヨックに打ちひしがれていたなんて、いくら一期一会だとはいえ、誰が言えるだろうか。一期一会だからこそ悪い印象は残したくない。たとえすぐに忘れられよう。

「いえ、別に」

「もしかして、その昔付き合ってた男の結婚式だったとか？」

マスターとおんなじこと言ってる。普通結婚式で落ち込むなんてないよね。いき遅れの負け犬ですって言い回しているようなもんだし。そんなことを考えながらフツツと笑った。

「そんなんじゃないです。別に、ほんと、なんでもないです」

「でも、自棄になつておれみたいに見ず知らずの男とこんなどこに来ちゃうんだから、何でもな

痛いところを突かれて返す言葉もない。でも理由がくだらなさすぎて経緯の説明なんかできない。「馬鹿女つてことは重々承知してます。反省してます。でも、相手が一ノ瀬さんでよかったです。」

この状況って下手したらものすごく危険ですよ。こんな冒険二度としません」

「二度としないのはいい心がけだけど、安心するのは早くない？」

くいつと顎を持ち上げられて、軽いキス。え！ さっきのしょんぼりさんどこいった？

衝撃のあまり一ノ瀬さんをガン見すると、近い距離がさらに縮まってまた唇が重なった。

「んっ」

唇でこじ開け、舌が押し入ってくる。私のジャケットを落とし、むき出しにした肩を撫でる彼の指はいやらしく優しい。

「いち、のせき、ん」

口内を玩ぶように舌を絡めたあと、唇を離して短い呼吸で呼ぶと、陶醉した眼差しとぶつかった。

「おれ、一ノ瀬恭司っていうんだ。下の名前、呼んでよ。百合佳ちゃん」

「……恭司さん」

「そんな声で呼ばれると、ゾクッとくるね」

ちゅつと音を立てて、首筋に厚い唇が押し当てられる。やっぱりキス上手い。ぼおつとしていたら呼び鈴が鳴った。

「あ、食い物来た」

お預けか！ ううつと唸りながら彼を見上げると、髪の流れにそって掌で撫でられた。

「取ってくるからちゅつと待ってて」

と苦笑交じりに頬にキスして玄関のほうに行ってしまった。

「あ。百合佳ちゃん、風呂できてるよ」

シャボン玉がぱちんとはじけるように、うっとりした気分が覚めた。浴室にかけこんでみるとお湯は自動で止まっている。楽しみにしていたローズの香りの泡風呂の入浴剤の封を切る。ピンク色のとろりとした透明の液体を浴槽に注いでジャグジーのスイッチを入れた。間接照明の光に浮かび上がる浴槽が綺麗で感動した。ぶくぶくと泡が立ち、辺りにローズの香りが充満する。

鼻歌交じりで洗面台の大きな鏡の前でほどいた髪を梳いていると、彼が顔を出した。

「ご機嫌麗しいようですね？」

「お風呂すごいですよ。泡風呂とかテンション上がりますって」

彼は片手に持っていたワインを洗面台の脇に置くと、私の背後に立った。

「じゃあ、食い物後にする？」

言いながら首のうしろを舐める。顎髭がちくちく当たる相乗効果で、ぞわぞわと言い知れぬ快感が背中に走った。思わず目を閉じて息を漏らすと、彼は、ふふつと楽しげに笑い、首から背中を唇でなぞっていく。

「お風呂、まだですから、ね、恭司さん」

「百合佳ちゃんの、匂いも味も好きだよ」

「そんなこと、言われても……、あつ」

大きな掌に臀部を撫でられ体が跳ねる。薄目を開けて鏡越しに見ると、背中を唇で愛撫しつつ、もう片方の手で膝の辺りを撫でている。

「伝線、上のほうまで伸びてる」

つつ、と指が内腿に流れて、太腿の付け根を撫で弄られる。まだ最終地点には触られていない。それでも息はぐんと上がる。少し強引にドレスの裾がたくし上げられてストッキングが太腿の半分まで下げられる。こうしている間も耳を舌で舐られているので、気持ちは煽られっぱなし。

早くもと触れて。この先が欲しくて脱がされるのを望んでいる。外気に触れた内腿が粟立ち、奥がきゅうつと疼く。左手が引きあげられ、そのまま胸元に滑り込んできた。

「ブラ、つけてないの？」

カップ付きのドレスだから、と答える余裕なんてあるはずもなく、耳を犯されたまま小刻みに頷く。偶然か、胸の先端が爪で引っかかれ、チリツと鋭い感覚が走った。乳房を鷲掴みにされ、ぐいぐいとこね回される。右手も連動して下着の上から刺激され、中指が窪みに合わせて押し当てられた。

「ああっ」

「えっろ。百合佳ちゃん、鏡で自分の格好見てみなよ」

からかうように囁かれて、言われたとおりに顔を上げた。彼の手で隠されているものの、片方の乳房が深紅のドレスからこぼれ、裾も捲られ彼の手が入り込んでいる。半端に下がった黒のストッキングのせいで内腿が窮屈に絞めつけられている。

「綺麗な格好が台無しだ」

体を反転させられ、洗面台にうしろ手をつく。向き合った状態が恥ずかしくて俯いたが、お構いなしにむき出しの乳房に喰らいつかれた。

「んああっ」

先端を甘噛みや舌先で刺激される。唇が離れると、赤く腫れたように色づき、つんと硬くなっているのが見えた。

彼がしゃがむのと並行して下着もストッキングも下げられる。目の前にドレスの奥が晒されていると思うと、たまらなく恥ずかしかったが決して嫌な気はしない。

こちらを見上げる少し垂れた尻の、鋭い眼が、情欲に濡れている。下着を引っ掛けた左の足首に啄むようなキスが落とされ、そのままゆっくり持ち上げられた。

彼が立ち上がり、私は広い洗面台に腰かけるようにして少し背中を倒した。屈辱的な体勢で見下ろされたのも束の間。

覆いかぶさるように口づけられ、食むように舌を絡ませ合った。キスで押し返ししながら上体を上げて、彼のベルトへ手を伸ばした。

ごついバックルがなかなか外せなくてやきもきしていたら、もどかしくなったのか彼は自らベルトを外し、腰を引き寄せてくる。

張りつめた彼の先端が、ちょうど入り口の真ん中に押し当てられたが、ずるりと滑って勢いよく弾かれた。この期に及んでまさかの事態。久しぶりすぎて入り口閉じてた？

え？ と意外そうな顔で、彼は結合し損ねた部分と私の顔を交互に見た。多分、私も同じような顔をしている。見合わせたら可笑しくなって、どちらともなく嘔き出した。

「なんか焦ってばかりでスムーズにいかないね」

彼はそう言って笑いながら、私の頬や額にキスを散らす。

「すみません。早く欲しいのは山々なんですけど」

「うん。百合佳ちゃんすごく濡れてる」

彼の頬に手を添えて、私からもキスを返す。お互いの服を脱がせ合い、床に全部脱ぎ散らかした。けれど少しだけ理性を取り戻しつがある。

「せっかくなのでお風呂入りましょう？」

「せっかかない感じなの？」

「お風呂入ったくらいで冷めませんよ。あなたにキスされればすぐです」

「ええ？ 自信ないなあ」

「まあそう言わず確かめてみてください」

ワインを持ち込んで、バスタブの中で乾杯する。一口飲んでキスして笑い合う。

初めて触れ合う肌って格別。シルクもカシミアも触れ合う素肌には敵わない。なんて熱くて、滑らかな肌。筋肉を包む極上の皮膚や、私の望みどおりの逞しい腕と厚い胸板。低くかすれた吐息なんかも絶品だ。深い口づけをしながら、彼の張りつめたペニスに手を伸ばす。

おっと、こっちはなかなかワイルドだ。これはいきなり入らないかも。

形や長さや太さを手で計りながらゆるゆる動かしていたら、キスが滞り始めた。唇を離すと、喘ぐような短い呼吸をしながら、彼は苦渋の表情を浮かべている。

「はやく入りたい」

泣きそうな声で呟いて、熱に浮されているような目で私を見つめる。

「私も早く欲しいです」

キスをする大きな舌が入り込んできて口内がいつぱいになる。お互いにしがみつくように抱き合い、バスタブの中に小さな嵐が起きる。

薔薇の香りの媚薬効果なのか、はたまた安ワインのせいなのか、酔っぱらっている。全部恭司さんのせいだ。

風呂を出て大きなバスタオルで互いを拭きながら、じゃれあうようにキスをした。そして私は軽々と抱き上げられ、二人でベッドへなだれ込む。

「キスしたよ。もう濡れてる？」

唇を離して、首を傾げてこちらを覗き込む彼の潤んだ瞳が、少し意地悪く光る。

「……ね、早く来てください」

かなり恥ずかしかったが、自分の指で入り口を広げて見せた。

「百合佳ちゃん」

ぐっと膝を抱えられ引き寄せられ、今から結合せんとする部位をまざまざと見せつけられる。彼は自身に手を添え、指で広げた裂け目に先端を食い込ませ、腰を軽く前後させた。

ぐっ、ぐっ、と少しずつ前進する。それと同時に内側がこじ開けられていくのがわかる。
「んっ、んっ、はいってきてる」

じわじわと押し開かれる感覚が気持ちいい。充分に濡れていたのもあって、先端が定まると後はスムーズにいった。

同時に深い息をついて、互いの感触を嘯みしめるように抱き合う。中は余すところなく恭司さんでいっぱいになった。それがなんだかとても嬉しい。

「ヤバイ、気持ちよすぎる」

彼は私の肩に顔を埋めたまま唸った。

髭がくすぐったくて笑いながら身を振ったけれど、がちり抱き込まれてびくともしない。

「動いちゃダメそうですか？」

中にある質感がもつと欲しくて、きゅっと力を込める。

「ちよっ、待って待って」

彼はがばつと顔を上げて二回深呼吸すると、せつかく挿入したペニスを引き抜いた。

「え、なんでですか？」

急に空洞になった中が寂しく手を伸ばした。ここでお終いなんて絶対いや。

「なんでって、まだいきたくないから」

そう言っつて、ふたたび私の体を柔らかく押し倒すと、両足の間に顔を埋めた。

「や、恥ずかしい！」

「大丈夫大丈夫。気持ちよくなつてほしただけだから」

温かい吐息と柔らかな唇がぬるぬると恥ずかしくてたまらない場所を覆う。

「ひうっ！ や、ああ！」

舌が知らない生き物のように動き出す。

ちよ、これ、なに。こんなのやばい。声が漏れる。恥ずかしいのに、気持ちよくなっちゃう。

ちゅ、ちゅ、じゅるじゅる、と粘着質な音が聞こえる。卑猥なディープキスに、恥ずかしさと気持ちよさで混乱する。唾液と粘液でべちゃべちゃになったシートが冷たい。硬く尖った敏感な箇所を舌先が性急に舐る。こんなのずるい。私はじわじわと昇りつめていく。

「あ、ダメ。あああ、いっちゃうう！」

体中痙攣して頭の中に火花が散った。恭司さんが体を起こして、私を見下ろす。どことなく勝ち誇ったような目をして自らの唇を舐めた。

「気持ちよくなれた？」

こんな一方的なのは、自慰行為を手伝ってもらっただけみたいで悔しい。ならば、こちらも。

首に手を回して口づけを催促する。体を起こし、恭司さんを座らせて、互いに伸ばした舌でついたり、舌先を舐め合ったりしながら、様子を窺う。困惑と好奇心、欲情と純情の入り混じったような、不思議な目をしている。

「どうしたの？」

「私も気持ちよくしたいなあって」

「これからなるから大丈夫」

彼は私を自分の上に抱き寄せる。座ったまま向き合って重なり合う。汗で濡れた彼の頭を抱え込み、下から突き上げられるのを受け止めた。

熱い息とぬめった舌が、私の乳首を攻める。理性がぶっ飛んだ。互いに気持ちよくてどうにかなってしまうている。

私の内側は恭司さんの形によく馴染み、一分の隙もできないほど、奥へ奥へとねだる。

ワケがわからなくなりながら体を反転させられ、腰を引き寄せられ、臀部を突き出す格好になつた。

恥ずかしくて抗おうとするも、入り口をつつく熱に負けて、大人しくシートに手をついた。ずんずんと勢いよく中をかき回す質感に声が漏れた。激しく腰を打ちつけられて、彼のリズムどおりに鳴いてしまう。

頭の中が久しぶりの快楽に支配されて、動物のようによがっていると、うしろから腕を掴まれて上体を起こされた。ペニスが抜かれる。

ぐずつく間もなくキスで塞がれ、仰向けに放り投げられ、肉体の壁が覆いかぶさり、執拗なほど深いキスを浴びせられる。

口の周りを唾液だらけにして顔を上げた彼は、猶猛な獣のようだった。足を開かされ、また挿入される。荒い吐息と唾を嚙下する音。

そしてベッドの軋む音と淫らな水音。何度も中を突き上げられて、頭が朦朧とする。ゆるゆると

白い靄が意識を浸食していく。その刹那、脳がかき乱されて、声が一段と高くなった。意識がどこかに引きずりこまれてしまう。無我夢中で恭司さんの肉体に縋りつこうと指に力が入ったが、状況さえまったくつかめない。

気づいた時には全身が痙攣して、まもなく何も考えられなくなるほどの倦怠感に覆われていた。驚いた恭司さんが体を離して何度も名前を呼んでいる。黒目を動かして答えているけど、声を出すのすら億劫だ。

「百合佳ちゃんっ？ 大丈夫？」

「こんなの……知らな……い」

意識は抗えずぶつ切りで暗転した。

無機質な電子音で、ほとんど気絶と言えるくらい真っ暗な眠りから覚めると、体（主に腰）が重くてだるい。二日酔いとはまた別の倦怠感で薄目を開けるのが精一杯だった。被せられた掛布団が暖かくて、もう一度眠ってしまいたいそうだ。部屋の中は薄暗く、ほのかに鉛色の光に照らされている。

「もしもし？ おう、なんだよ？ あ？」

浴室のほうから恭司さんの怠そうな声が聞こえてきた。相手は親しい仲なのか、受け答えがかなり乱雑だ。

「今？ 地元に戻ってるよ。いいだろ別に、オフなんだから。いや、リサだって友達と旅行がどう

の言つてたじゃねえか。ああ？ 東京に戻つてきてるつて？ んなこと知るかよ。は？ デキた？ お前デキないつつてたじゃねーか。マジかよ。まあいいや、オメデトウ。はあ？ 今から？ 帰んねーよ、何時だと思つてんだよ。うっせえ、そうそうお前の都合に振り回されてたまるか。は？ おい、リサ？ チッ。切りやがった」

デ・キ・た？

その一言は、人が変わったような乱暴な喋り方や、女の名前よりも衝撃的だった。親しい間柄なのは明白。

あれだけ男前なら、彼女も気が気じゃないだろうなあ。つていうか、実際私みたいな馬鹿女が引つかかつてるわけだし。

どこか他人事ひとごとのように思った。欲求不満が解消された後の、いわゆる、賢者タイムというものか。冷静な気持ちの中に、不意にフラッシュバックした昨夜の行爲。

よがりまくっていた無様な自分を思い返して激しい自己嫌悪がふりかかる。

最悪。最悪だよ。できるなら今すぐ自分の存在消去したい！ しかも途中で意識ないし。

恭司さんの苛立った大きな溜息のあと、ガチャリとドアの閉まる音と蛇口をひねる音が聞こえた。このまま寝たふりして朝を迎えて、どんな顔するつもりだ百合佳。相手は妊娠した女をほつたらかしにするようなるくでなしたぞ！ 妊娠した彼女（奥さん？）より自分を優先してくれたなんて喜ぶような人間では、断じてない！

と自らみずかを鼓舞し、怠だるい体を奮たげい立たせ、足音を忍しのばせながら衣服をかき集めた。

下腹の内側に異物感がしつかり残っている。その感覚にふたたび欲情しかけたが、ここに留まっていたくなかった。細心の注意を払いながら手早く静かに衣服を身につけ、ストックキングをごみ箱に丸めて放つた。

見つからないように、浴室の気配を危惧しながら、二枚あったカードキーのうちの一枚を握り、負け惜しみと皮肉のつもりでサイドテーブルの上の便箋を一枚破つて一筆認よためる。

二度と会うことのない女に優しくするより、奥様とお腹のお子さんを大事にしてあげてください。さようなら”

自分の財布から一万円札を二枚抜き取りメモと一緒にテーブルに置いて、ジャケットを羽織り、バッグを持って忍び足で退室した。我ながら早業だと感心しながら、エレベーターに乗り込んで安堵あんの息をつく。

世界に一つしかないお気に入りの靴は、足音が響くのが怖くて置いてきた。ヒールも折れていたし、きつとあの靴は呪われていたんだ、と思うことにした。

エレベーターを降りると、ロビーにいたフロントマンが私を見て驚いた顔をした。けれどこちらから笑つて見せると困惑交じりに会釈してくれる。

頭がおかしいと思われたかも。まあいいや。二度と会わないだろうし。

スマホを見ると新着メールが一件。ディスプレイに表示された時刻は午前二時十二分。相手より先に一人で部屋を出るなんてデリヘル嬢みただと思う。いや、彼女たちにはお迎えがある。それに私が彼を買つたんだ、と思い直す。

放任主義なのかしら。あんな男を放し飼いでできるなんて、どれだけいい女なの。私みたいにヤケクソワンナイトラブで地底まで落ち込んでいるようじゃ無理だ。

思いっきり身も心もボロボロで、泣き喚いてしまいたくなかったが、深夜の街で素面でそんなことをするのは痛いのでやめた。

薄着というより、下着より保温性皆無なパーティードレスにファッション性重視の毛皮のショートジャケットでは寒いし、アスファルトは凍ってるんじゃないかと思うくらい冷たい。ホテルを出てすぐのロータリーに並んでいるタクシーがこんななありがたいものだとは思わなかった。

こんな寒空の下スカスカのドレスに裸足で歩いている女なんて、どうかしてる。適当なタクシーに乗り込むと運転手がぎよっとした顔をしたが、乗車拒否はされなかった。

行き先を告げて座席に沈むようにもたれかかると、ホツとしたのか、涙が出てきた。

ろくでもない男だつてわかっているのに恋しくて、そんな自分の馬鹿さ加減に呆れて、情けなくて、色んな感情がない交ぜになって一気に溢れた。

体がまだはつきりと覚えている。そんなに執拗な愛撫をされたわけじゃないのに、中を突かれて制御不能になってしまふなんて、初めてだった。

無言のまま車内の暖房が強くなった。ひねり出すような空調の音と共に暖かい空気が充満する。

恭司さんの体温を思い出したら、また涙が出てきた。恋人になりたいという発想はなかったはずなのに、自分の中の矛盾する気持ちに戸惑った。

タクシーが私の住むアパートの前に停まって、すつからかんの財布からカードを引き抜く。運転

手は私とカードをちらりと見て溜息をついた。
「メーター押し忘れたからそのまま降りていいよ」
涙も拭わず黙りこくついていた女を哀れんでくれたのか。皺の深い浅黒い肌に、ギョロツとした黒目が印象的な初老の男。彼の目に私はどう映ったのだろうか。
「そんな辛気臭い顔でいられちゃ夢見が悪くなる。幽霊でも乗せたと思つて忘れるから、降りて降りて」

ひどい言われようだが、丁重にお礼を言つて車を降りると、走り出す間に軽くクラクションが鳴らされた。
励ましてもらえる資格なんてないのに、人つて優しい。胸を打たれ、感慨に浸る。
鉛のような疲労感と身を切るような寒さにうっかり自己憐憫モードに入っていたが、なんでもい

いから男とやりたいなんて思つた自業自得なのだ。披露宴に行つて花嫁をバカにしたりするから罰が当たつたんだ。

だいたい筋違いの喪失感なのに、胸が痛いなんて、どここの悲劇のヒロインよ。へそで茶を沸かすわ。やることやつて帰つたんだ。セックスで落ちる恋なんてたちが悪い。

順番も滅茶苦茶だし、程度が低い。もういい。シャワー浴びて、歯磨いて寝よう。明日は休みだから体を休めて、明後日から出勤だ。頭の中で自分自身を叱咤激励して、よしっ、と握りこぶしを作る。

いい夢見させてもらつたじゃない。ラッキーラッキー！ ビギナーズラックよ！ 明日からまた

いつもの毎日。リセットリセット！ そう思ってみても、実は心は晴れていない。無茶苦茶になった感情をどうにか抑え込んで部屋に入る。真っ暗なワンルームが、残り少ないライフゲージを〇にした。

マジ、なにやってんの、私。

ドレスを脱いでハンガーにかけた。拭き落としクレンジングで化粧を落としてベッドの上のルームワンピースを被る。冷たい布団に包まって、ぎゅっと目を閉じた。疲労がピークに達していたせいか意識はあつという間に暗転した。

コールタールのような眠りから泥沼の目覚め。時計を見れば12…36の表示。昼過ぎだった。帰つたのが三時過ぎだとしてたつぷり九時間眠ったことになるのに、少しもスッキリしてない。

捲りあがったルームワンピースの裾を下げてベッドから出る。左右に上半身をひねって背骨をほきばきいわせて背伸びをしても、まったく爽快感がない。

あのまま寝たふりをしていたら、彼の腕の中で目覚めていたんだなあ。恭司さんビックリしたかな。それとも怒ってるかな？ 裏切ったことになるのかな？ いや。いやいやいや待って待って私。妊娠した彼女を冷たくあしらう男だぞ？

わずかな可能性として、彼女が重度のメンヘラほら吹きで、度重なるデキたデキた詐欺にいい加減うんざりしてるとか。

仮にそうだとしても、恋人か嫁かわかんないけど、その存在を無下に扱うような男は信用できないし、わかって平気な素振りができるほど強くない。

これって、まだそんなに嵌まってないってことかな。他に女がいてもいいの。今この時、一緒にいる時間があればいいの、なんてのは無理だ。

私は欲深い女だから、他の女の影がちらついているのを黙って我慢なんてできない。

そういえば勢いで避妊なしでヤっちゃった。行きずりで避妊もしないなんてどれだけ馬鹿なの。冷静になるほど怖い。

もしこんな話を知り合いから聞いたら、うわー馬鹿だなーと軽蔑混じりに心底呆れるレベルだ。本当に二十七にもなつてなにやってるの、私。

悶々としていても始まらない。昨夜のままのべとついた髪と顔が気持ち悪くて、すぐにシャワーを浴びた。

熱いお湯をかけながら恭司さんが触れたのを思い出してしまう。念のため確認したけれど、中にも下着にも、残滓らしきものはなかった。

私だけイッチャつたのかな。でも、外で出してもデキる時はデキるっていうし。ブルツと身震いをして、無意味だとわかつていながら念入りに下腹部を濯いだ。

ええい！ ぐじぐじしても明日は仕事だ！ せっかくの休みを湿っぱいまま終わらせるなんてもつたいない！ 昨夜は昨夜！ 昨夜は終わったのだ。

化粧をして、クローゼットを眺め直し、ハイネックニットと下はスキニーパンツに着替えて、昨夜のドレスをトートバッグに入れて、すぐに出かけられるように準備を済ませる。スマホをチェックすると、通知が一件から二件に増えていた。どうせネットショッピングの広告だろうと高を括つ

立ち読みサンプル はここまで

て開いたら、昨夜二十三時頃に母親から一件、もう一件はレンタルビデオショップの広告だった。母親からの連絡とは嫌な予感しかない。開いてみると、明日起きたら折返しちょうだいとのことだった。履歴からかけると七回目のコールで繋がった。

「あ、もしも百合佳？」

「おはよう。どうしたの？」

「どうしたのって、滅多に連絡よこさないから心配してたのよ。だいたいおはようって、もう昼過ぎじゃないの」

「ああ。ごめん」

昨夜あんなことをした体が乾く間もなく、母親と電話なんて罪悪感しかない。

「とりあえず元気にしてる。今急いでるの。ごめん、切るよ」

母親と世間話なんてできる状態じゃない。兄は新婚で、親戚の美樹ちゃんは臨月で、叔父さんが癌で、お婆ちゃんが認知症で。おめでたい話とおめでたくない話をのんびんだらりと巡回して、あんなもそろそろいい人いないの？ と尋ねられるのが関の山。

何か言いかけた母親の声を無視して終話ボタンを押す。

いい人ね。いたよ。でも、そういう人って大体ソールドアウトしてんだよ。おこぼれが回ってきたけど、そんな話聞きたくないでしょ？ 私だって言いたくないもん。

アパートを出てみると、曇り空。いまいち気分も上がらないが仕方がない。

ネットで行きつけの美容室に予約を入れた。午後四時まであと二時間半。移動時間で約三十分。

駅前のコーヒESHOPPで昼食でもとろうか。

チャコールブラックのトレンチコートボタンを上まで留めて、ヴァイオレットのカシミアのマフラを巻く。レオパードのエードパンプスを鳴らしながら、上の空で歩く。

優しくて、色んなことにこなれてる風なのに、純情そうなへたれっぽさを持ち合わせていたり、でも、キスは上手いし、体だってセックスだってよくて、ろくでなしって皆ああなの？

あんなのにどう抵抗すんの？ 皆そんなに鋼の理性で鉄の貞操観念なの？ やっぱ私だけが馬鹿なの？

ああ。泣きそう。ワンナイトラブユニオンがあったら入りたい。傷の舐め合いと気休めが欲しい。もう絶対一夜限りの恋なんてしない。惨めなだけなもの。

悶々としていたら、なにか食べようと思っていたのに、コーヒESHOPPのメニュー表を見た瞬間に食欲が失せた。カフェモカを頼んで席を探しに行く。化粧は通常運転ながら髪の毛は乾かしただけだ。やっと胸まで伸びたストレートヘア。切ってしまうのはもったいないので、パーマをかけて色も少し明るめに変えてみよう。窓ガラスに映る自分を見ながら漠然と考えた。

結局、カフェモカを半分残し店を出て、駅ビルの地下のクリーニング屋にドレスを預けた。書店に行こうとも思ったが、よくわからない恋愛自己啓発本なんかをうっかり手に取ってしまいそうやめた。

その上の階にある大型CDショップにふらりと立ち寄ると、入り口で足が竦んだ。

入り口の特設ブース。『ザコールドマグノリアクラシカルローズ』と銘打たれたポスターが目が釘